

（育児・経済・家庭の理解
健康・時間・高齢者介護）

苦しみを喜びにかえて

「私たちが何かをしようとするとき、さまざま問題にぶつかります。それらを乗り越えて精一杯今を生きている人たちが…。不平不満に埋もれている貴女。もう一度何かにアタックしてみませんか。

自分の仕事に 責任と誇りを持って



（磐田市）
袴田良子さん

「若かったからできたのよ。無我夢中だった」。静かに微笑みながらしつとりと話される袴田さん。

高校卒業後就職した会社は、お茶くみと使い走りの毎日でした。何かをしたい、知的意識を失いたくない、世の中のことを知りながら目的を持って勤めたいと、翌年公務員試験を受け、浜松税務署へ勤務となりました。以来三十九年、西部の各署や名古屋等への転勤を経て、昭和五十九年には、県下の女性第一号総括国税徴収官に抜てきされ、今年七月、名古屋国税局税務相談官を最後に退職されました。九月からは税理士として、みなさんのお役に立つ税務相談を頑張っておられます。

袴田さんは、こう続けられます。「一人じゃ何もできないものよ。家庭では、夫と子供。職場では、先輩・同僚・後輩。共同生活だか

ら、今何をするのが一番重要なかと厳しい選択を要求され続けてきたように思いますね。」

袴田さんの出産は、職場では初めてのことでした。産前産後の休暇等、自分自身で法律の勉強をして届出をしました。当時の女性は結婚して家庭に入り子育てに専念する人が大部分を占めていました。結婚後も、出産後も、仕事を続けるため、袴田さんは地道に努力を重ね、周囲に問いかけて、働く女性の地位を築いていきました。

仕事と育児の両立、それは現在も大きな問題ですが、袴田さんも娘さんの盲腸の手術に立ち会えたかったという思いがあります。遠足、参観会など出席できない母親に、さびしさをぶつける娘。夫

との二人三脚で何とか乗り越えられたそうです。

「最初にレールに乗った私が、くじけるわけにはいかなかった。次の人が続かないでしょ。目標を決めたらできる限り努力しました。自分のやる気次第で、女性にも必ず道は開かれるはずですよ。力強い意志が伝わってきます。」

みんな悩みがあつて、苦しいことは苦しい、でもくじけないでと励まし合った仲間と、後輩のために、女性の地位を確立させようと組合活動にも積極的に参加しました。忙しい時ほど時間を有効にと。メモに時間割をつけ活用しました。中学生のころ専業主婦を夢みていた袴田さんの娘さんも嫁がれて税理士への道を歩まれています。

プラス思考で
情報の輪を



(三島市)

高橋節子さん

高橋さんは、結婚し、前橋市で半年暮らした後、三島で夫の両親と同居しました。そのため家財道具が重複し、ムダになる物を、自宅でガレージセールをすることにしました。初めは、友人の間だけであったのがさまざまな人との出会いから輪が広がり、「葡萄倶楽部」というリサイクル情報誌を月一回発行するようになりました。孤独になりがちな人と物と街との情報を広く交流できたら：とりサイクルだけでなく、幅広い情報誌を目指しています。

「ぶどうのような弱々しい木でも枝を縦横に張りめぐらし、たく

さんのぶどうの実を实らせるように、より多くの人とのネットワークによる豊かな人と人とのふれあいを通じて成熟したぶどうのように甘さもすっぱさも分かる素敵な人になってほしい。葡萄倶楽部の名前にはこういう願いがこめられています。

高橋さん自身、一歳と五歳の子供を持ち、運転免許もなく、身動きのとれない状態でした。同じような立場の人たちは大勢いますが、高橋さんは、逆にその中でどういうことができるか考えたそうです。

「自宅で編集会議を無理ない程度に月一回開き、編集員も子連れで子供同士自由に遊ばせて、会議をするんです。一人でできないこともでもみんなの力で生かせることもあるんですよ」と、高橋さんは言います。

「仲間全員の協力があるからやっつけていけるし、ダメでもともと」という気持ちだから続けられるのかも。とは言っても時間のやりくりはなかなか大変です。子供を寝かして夜中にワープロに向かっているそうです。「自分のためだけじゃなく、みんなのためにもなるという充実感があるからやっつけていけるのかな。さわやかな笑顔で語ってくれます。今は県東部が

中心ですが、いろんなことを知りたい、やりたいと思っている人たちのために、ゆくゆくは中部、西部にも情報の輪を広げていきたいと思っています。」

情報もバラエティに富み、イベント、アート、教室、子供の遊び場の情報や、主婦がケイキなどを作りますというお知らせも。「物だけでなく人にも眠っている才能があると思うんです。せつかく身につけた社会経験や特技を眠らせずに生かすことができたらと思つて。この雑誌を媒体にいろんなネットワークがもつと広がってゆけば…」高橋さんの夢もますます広がっていきます。

明日香ちゃんは宝物



(静岡市)

井出容敬さん

井出さんは三人の子供のお父さんです。明日香ちゃん九歳、恭平くん四歳、悠太くん三歳。三人とも大切な子供たちですが、井出さんは明日香ちゃんがとりわけかわいい。

明日香ちゃんは、生まれたときの酸素不足が原因で重複障害もちほとんど寝たきりの状態です。その責任を問うのに医療裁判を起すことを考えた時期もありました。けれど裁判で費やす労力や時間を何よりも明日香ちゃんのために使いたいと井出さんは考えました。通勤時間を短くしようと転職もしました。

今から四年前、明日香ちゃんが静岡市の精神薄弱児施設「いこいの家」に通園しているとき、子育てに父親も参加しようと「いこいの会」ができました。現在、会は「四葉会」と改名され、会員は三十九名。「いこいの家」の父親だけでなく、子供の年齢も幅広く、さまざまな障害の内容、程度を持つ子供の父親が集まっています。子供の日常の世話で忙しいお母さんたちに代わって家族そろってのレクリエーションをしたり、各地の施設を見学したり・・・。

子育てはエネルギーがいります。ましてや障害を持つ子供のお母さ

んはなおさら大変のほうです。「お母さんがこれだけ頑張っているのだから、お父さんももっと頑張ってみよう。お父さんだったら、あんなことも、こんなこともやってあげられる。日常は仕事の関係で子供との時間はなかなか取れないけれど、たまにはお父さんたちで子供の面倒を見てお母さんを休ませてあげようよ」と父親たちは考えました。

現在の井出さん一家にとって、確かに明日香ちゃんは宝物なのでしよう。家族の誰もが彼女の笑顔が大好きです。「明日香によって多くのことを知り得た。嫌なものから逃げださない姿勢も含めて」と井出さんは語ります。

井出さんの夢は「街の中に障害と年齢の枠を越えた施設をつくること。動ける子供たちは自分のできる範囲で働き、寝たきりの子供でも、その子供が居ることによる存在感があるような場所。皆が自由に入出入りでき、それを実感してもらえたらと思う」。子供の将来を思わない親はいないでしょう。養護学校を卒業した子供たちを受け入れる場が一日でも早くできたらと心から応援しています。

限られた時間の中で



(水窪町)

西岡とき子さん

西岡ときさんは、水窪町ののまた山深いところ、夏焼に生まれました。小・中学校時代は山道を三十分歩き、飯田線に乗り、そしてまた歩いて水窪の学校まで通いました。少人数の遠隔地通学は本当に辛かったようですが、とき

さんは病気以外は一日も休まず通いとおしたそうです。夜間高校、専門学校、大病院を経て、栄養士、管理栄養士の資格を得たとき子さんに、現在の嫁ぎ先への縁談が持ち上がりました。

西岡家は水窪町の古くからのお寺で、町ただ一つの幼稚園の経営者でもありました。二人目の子供

が生まれて一年半、ときさんが三十歳のとき、園の創立者であり園長である姑のあさ先生から「幼稚園の教諭の免状を取ったら」と勧められました。寺の嫁であり二児の母であり、幼稚園のクラスを持ち、ときには町の在宅栄養士として講師をつとめ、一人四役をこなしながらの通信教育が始まりました。受講を勧め、家庭を支えてくれた姑のあささんは「この人の頑張りには並の頑張りではないんですよ」と話してくれました。「通信教育というのは本当に根性がなくてはやり通せません。一年に入学者は何千人といっても、卒業できるのはわずか三十〜四十人。」

「一番大変だったのがピアノでした。それまでドレミも弾いたことのない私が、三十歳になって一からの練習。子供を寝かしつけて夜中に起き、また目を覚ました子供を毛布にくるんで、ポツンポツンと朝まで練習したこともありました。夏の三週間のスクーリングの間に台風があり、お寺に土砂が流れ込んで大騒ぎしたこともありました。子育てが中途半端になつてしまうと悩んだこともありまして。でも、ときさんが最後までやり通せたのは、勉強できる楽しさ、家を守ってくれるお義母さん

のいたこと、それにスクーリングでたくさんの仲間と知り合い励まし合えたから・・だそうです。

西岡とき子さん。今三十九歳。水窪幼稚園の副園長です。健康志向の現在、栄養士としての仕事も増えました。貧血教室、糖尿病教室、妊婦乳児栄養指導、料理教室・・。やりがいのある仕事に、頑張り通した自信と充実感とで、彼女の顔はきょうも輝いています。

家族に見守られて



(浜松市)

中畑あけみさん

「看護婦の仕事って技術的なことも大事ですが、患者さんの心理状態を理解することが大切なんです。患者さんの気持ちを考えたと

きが、本当の看護の始まりです。……と熱っぽく話し始めてくださった中畑さん。看護婦になられて十八年目の、浜松医療センター中央材料室の婦長さんです。

「看護婦を選んだ以上、結婚してもやめない決心でいました。一番辛かったのは、主人の両親に、看護婦の仕事を理解してもらえなかったことです。両親は、時間になつたらすぐ家に帰ってくると思つていましたが、終業直前に緊急の患者さんが入ってきたり、引き継ぎがあつたりで、時間通りに終わらないんです。夜勤なども仮眠しているように思われがちですが、全然眠る暇もありません。それでも、子供をみてもらっている負い目があつて何も言えませんでした。では、どのようにこの壁を乗り越えられたのでしょうか。」

「主人が温かく見守っていてくれたこと。自分の気持ちの中では、絶えず葛藤はありましたが、姑を本当の親のつもりで接し、大切にすることが良かったのではないかしら。両親が子供たちをみていてくれたから、仕事が続けられたと思つて感謝の気持ちを忘れません。そんな気持ちで、年月をかけて次第に御両親に伝わっていったようです。」

「ストレス解消は、家事をやることです。時間がないと、かえつてうまく時間を使えるんです。一度家にいらしてください。家の中は、ピカピカですよ。それに子供たちもとても良い子なんです。」と自慢気に話された顔は、まさしく幸せなお母さん。看護婦としての喜びは、患者さんが元気になることで、辛いのは、亡くなられたときだそうです。「そんな時は、家族の方と一緒に泣くんですよ。」えっ／＼ペテラン看護婦さんが泣くなんて……。

驚きと同時に私の心は、柔らかく温かく変わっていきました。「感謝の気持ちを大切に生きている。」その言葉に、中畑さんの生きる姿が伝わってきます。

時代を乗り越えて



(静岡市)

山本良子さん

「読書と書道が大好き。」と微笑む山本良子さんは、七十三歳です。現在も女子高の保育科の先生として活躍されています。まだまだ若い山本先生ですが、時代とともに歩まれた四十年近い教職生活を、振り返っていただきました。

山本先生が、満州に勤務してらした御主人とお子様とともに、日本に引き揚げてこられたのは、昭和二十年のことでした。「満州にいた十年間は、日本を留守にしていた『無』に等しい時だった」とおっしゃいます。ですから、日本に帰つてこられてからが、先生にとって本当の意味で試練のときだったと思います。

教員の資格を生かし、昭和二十八年から二十年間、静岡市立安東幼稚園に勤務されます。当初からいきなり管理職という重要なポストにつかれたため、随分、勉強したとおっしゃいます。そして、このころ、「幼稚園一級免許状」を県で第一号として取得されました。この難関を突破されたことで、先生の努力と勤勉さが伺われます。報われることばかりではありません。先生は、当時の状況をこの

ように話してくださいました。「周囲の『雑音』はありましたよ。そして、子供を預かってくれた義母からも、『小さい子供をおいて働くなんて……』とちよっぴり厳しい言葉もありました。また、いわゆる引き揚げ者ということで、子供が毎日のように、近所の子供たちにいじめられました。辛かったですよ。でも周囲の『雑音』には、『今に見てろ。』と自分に鞭打つて働き、いじめにあつた子供には、『いつか人を乗り越えるように』と励ましてきました。」

母親が働いていることで子供たちには、大変寂しい思いをさせたと、今でも思うそうです。でも、「働くきっかけは、子供たちが、大学に行きたいと言ったとき、経済的な理由で断念させたくなかった。」とおっしゃいます。「くじけずここまでこられたのは、この仕事が好きだったから。そして、家族が健康だったからなんです。」が、何よりの力となったのは、明治生まれの御主人の「理解」だったのでは、ないでしょうか。それぞれの道を立派に歩まれている四人のお子様。九人のお孫さん。その存在は、時代を乗り越えてこられた先生の「勲章」なのです。

女はしかられ上手?

しかられるとき、男の子みたいに強くしかられないもの。
(小4女子)

男の子は皆不良?

男の子って乱暴だし、大きくなると不良みたい。それに女の子は赤ちゃんがうめるから女の子が得。
(小2女子)

今は女の時代

家庭は夫婦でつくるもの。男余りの今の時代、亭主関白なんて言ったら、結婚できないと思う。今は女が一人でもなんとか働いて生きていけるもの。
(20代 主婦)

人生に自由設計

男が働かないことに社会の寛容はないが、女には働くこと、結婚すること、子供を持つ、持たないなど自分で自由に人生を選択できる。
(20代 OL)

男の子はいいなあ

「女の子は行儀良くしなさい」って言われるし、お父さんの魚つりにはついて行けない。大好きな木登りもしかられる。それに弟がいつも遊びに行っているのに自分ばかりが女の子だからお手伝いばかり。男の子は得だなあと思いません。
(小5女子)

会社以外では女が得

女だから得と思うときと、損だと思うときがある。今の会社の中はやっぱり女だと損みたい。でも会社以外じゃ得する部分が多いかな。やっぱり男は外、女は家庭と役割分担されてきたせいかしら。
(20代 女性)

人生選択の自由

女の方が絶対損。学生時代成績優秀な私に、担任の先生が父に「ぜひ遠くの〇〇高校へ」とすすめてくれたのに、「女の子は家から通える高校でなければ」で近くの高校へ。「女の子には四年制の大学は必要ない。近くの短大ならいい」と言われました。今、あの時にもどれるなら、がんばって勉強するの

ゆとりと幸せは女の特権

女ってダーセンゼン得!若い頃は美しさの追求、今は家庭生活の充実、子供との楽しいひととき。これから働こうと思えば自分を育てることも可能な身分。夫と比較して、このゆとりと幸せ。感謝しています。
(30代 主婦)

男の義務感

家族を食べさせていかなければならないという義務感があり、仕事も簡単にやめられない。その点は女は気楽でうらやましい。
(40代 男性)

スクランブル

女は得
を拝借いたします...女は
思ったり得したなあと
めてみました。



女の方が気楽

扶養の義務感がないので、仕事を自由に選べるし、いろいろな生き方が選べる。そのときにあった時間の使い方ができるので女の方がいい。
(40代 主婦)

総合点で女がいい

男の人ほど、仕事、社会できびしいことを要求されない。しかし、仕事が忙しいからといって家事をしないわけにはいかないし、日によって女であることが良かったり悪かったりするので、絶対とは言えないけど、まあまあ女の方が得。
(40代 主婦)

気がつくこと

結婚によって人生が変わってしまった。夫は早死にし、夫の両親の面倒を見なければならず、生計と両方で苦しんだ。若い時はそれに時間をうばわれて、気がついた時には年をとっていた。
(50代 主婦)

時代のせい

時代が楽しい時ではなかった。だから今の人は自由で幸せだと思える。結婚相手も親が決めて、選ぶことができなかった。そういう意味では損だが、時代のせいだと思える。今の時代は若い女性は得することも多く今の時代に生まれたかった。
(60代 主婦)

自分の夢が消えていく

絶対損!今度は男性にうまれたいくらい。なぜって男性は一生、自分の思いのまま夢に向かって進むことができる。女は結婚したらそれも中断、もしくはあきらめなければならぬから。
(30代 女性)

クーマン

女は損
……ちょっとお耳
あなたは女に生まれて損したと思ったりしたことありませんか?
そのあたりのホンネの声を集



男は仕事オンリー

主婦もしながら、子供の世話、仕事などいろいろなことに対処していかなくちやいけぬ。男は仕事だけに集中してられるから、仕事は大変だろうけどひとつだけだったら私だってやれる。
(30代 共働き主婦)

子供の世話は女だけ?

夜、久しぶりに外出しても子供のことがどうしても頭から離れない。二人の子供なのにどうして女ばかり気がねしなければならぬの?
(30代 二児の母)



ってとこかしら。
(40代 主婦)

考えたこともない

時代が時代で損か得かなど考えている余裕がなかった。与えられた役割をこなしてきただけ。
(60代 主婦)

女であることの得する部分、損する部分は人さまさま。また年代によっても感じ方が違うようです。損と得は表裏一体。女が得する分男は損だと、男が得する分、女は損だと感じているのかもしれない。お互い損だと思っている部分を理解しあえたら、男も女も、もっと自分らしくのびのび生きていけるのかもしれないね。